

「灯」の周辺

ある知人から久しぶりの電話。「合同新聞へのしばしばのご投稿楽しく拝見しています」と。投稿ではなく寄稿ですよと言いつつ直したかったが、止めにした。

「灯」を書き続けてずいぶんなるし、社に迷惑をかけてはいけないので、中止を申し入れている。まだ返事を頂いていないから、それに悪乗りしてまだ続けている。

なぜ執筆を止めたのか。拙文が文字通り拙文になっているのではという不安が付きまとい続けているからである。私の能力では自分の文の評価ができかねる。だから「ご希望通り、長いことお世話になりました」という社からのあいさつ状が来るまでは続けようと、他人まかせで厚かましい話ではある。

こんなところで書いてよいか。私は他の「灯」をほとんど読まない。関心はあるが、読めるようにしてくれる文章はまれだからである。随筆とは相手構わず思うことを気楽に書くことだという考えもある。しかし、文章は話以上に相手を大切に考えねばならない。拙文にそれができているだろうか。

とかく言うぐらいなら、さっさと止めてはどうか。なぜ止めないのか。身辺雑記で知人たちへのあいさつの意味も込められるし、未知の方からの音信がお陰で増えているからである。県庁勤務のころと違って、今は音信がめつきり減ってきた。先程の「灯」で『この人を見よ』と失明少女の名文を紹介したが、未知の婦人からのお便り。「遠くに嫁いだ娘の誕生祝に少女の原文を筆写して送りました」と。私にとって貴重な「ふれあい」である。

書かれて社は困るかな。稿料は二千円の図書券。私にはそれも魅力。これで買った本にはふしぎと良書が多い。昨日買ったのは外山滋比古著『日本の文章』。

(一九八四年十月二三日)